

Title	経済史って何だろう
Sub Title	
Author	杉山, 伸也
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1996
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.88, No.4 (1996. 1) ,p.624(122)- 625(123)
JaLC DOI	10.14991/001.19960101-0122
Abstract	
Notes	読書案内
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19960101-0122">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19960101-0122</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

読書案内

経済史って何だろう

杉山伸也

まず「経済史」とはどのような学問なのか、あるいは「経済史」と「経済学」はどのように違うのかを知るためには、岡田泰男「**経済史研究の方向—理論と歴史—**」（『三田学会雑誌』74巻6号、1981年12月）がわかりやすい。もうすこし「経済史」について知りたいときには、小松芳喬監修「**経済史の方法**」（弘文堂、1969年）に収録されているイギリスの著名な経済史家の教授就任講義を読むとよい。また、E.H.カー「**歴史とは何か**」（岩波新書、1962年）は、経済史を専攻するしないにかかわらず読むべき基本書である。

経済史に関して、これまでどのような学説があり、議論がおこなわれているかを概観するには、角山栄・速水融編「**経済史学の発達**」（『講座西洋経済史』第5巻、同文館、1979年）のほか、角山栄「**経済史学**」（東洋経済新報社、1970年）や鳥居泰彦「**経済発展理論**」（東洋経済新報社、1979年）が便利である。また方法論に関心があれば、理論的アプローチと歴史研究の統合化をこころみたJ.R.ヒックス「**経済史の理論**」（日本経済新聞社、1970年；講談社学術文庫、1995年）、世界システム論から世界史像の再構成をこころみたI.ウォーラステイン「**近代世界システム**」全2巻（岩波書店、1981年）をはじめ、斎藤修「**プロト工業化—西欧と日本の比較史—**」（日本評論社、1985年）、竹岡敬温「**「アナル」学派と社会史**」（同文館、1990年）などが知的な刺激をあたえてくれる。

日本でおこなわれている経済史は、地域的には大きく欧米経済史（西洋経済史）、アジア経済史（東洋経済史）、日本経済史の3つに分けられるが、一般的なテキストを中心に紹介すると、まず西ヨーロッパが「産業革命」以降めざましい経済発展をとげたということは歴史的事実でもあることから、これまでの経済史研究もイギリス、フランス、ドイツなどの西ヨーロッパの主要国を中心に描かれてきた。欧米の大学でテキストとして広く利用されているのは、D.S.ランデス「**西ヨーロッパ工業史—産業革命とその後、1750～1968**」全2巻（みすず書房、1980、1982年）であるが、世界経済の中心であったイギリスに関するP.マサイアス（小松芳喬監訳）「**最初の工業国家**」（日本評論社、1972年）も必読書である。最近の欧米経済史に関する学会動向や研究水準をしめす概説書とし

ては、**岡田泰男編『西洋経済史』**（八千代出版，1995年）があげられる。

最近では，19世紀以降の西ヨーロッパ中心のアプローチに対する反省から，欧米諸地域が経済発展の一般的なモデルとしてよりも相対化された地域として描かれる傾向にあるが，これまでの欧米中心の経済史に対して，**長岡新吉・太田和宏・宮本謙介編『世界経済史入門—欧米とアジア—**（ミネルヴァ書房，1992年）は，アジア地域もふくめた近代世界を対象とし，最近の論争を紹介するなどバランスよく描かれている。

アジア経済史に関する概説書はないが，**溝口雄三・浜下武志・平石直昭・宮嶋博史編『アジアから考える』全7巻**（東大出版会，1993～94年）や**浜下武志・川勝平太編『アジア交易圏と日本工業化，1500～1900』**（リポート，1991年）から，アジア経済史がいかに未開拓の分野であるかを知ることができよう。東南アジアについての入門書としては，**永積昭『アジアの多島海』**（講談社『世界の歴史』第13巻，1977年）と**石井米雄『インドシナ文明の世界』**（同，第14巻，1977年）がわかりやすい。また広く研究のフロンティアを知るためには，『**世界史への問い**』全10巻（岩波書店，1989～91年）の収録論文をみるとよい。

日本経済史では，**中村隆英『日本経済—その成長と構造—』**（第3版，東大出版会，1993年），**石井寛治『日本経済史』**（第2版，東大出版会，1991年），**三和良一『日本経済史』**（放送大学教育振興会，1989年）および『**概説日本経済史』**（東大出版会，1993年），**新保博『近代日本経済史』**（創文社，1995年）などを読みくらべてみると，日本に関しても立場によっていかに多様な解釈が可能であるかを知ることができる。また最近の研究動向を知るためには，『**日本経済史**』全8巻（岩波書店，1989～91年）が有益である。

経済史のゼミを希望しているがテーマをきめかねている場合、あるいはすでに経済史のゼミに所属しているものの卒論のテーマがきまらないときには、**社会経済史学会編『社会経済史学の課題と展望』**（有斐閣，1992年；有斐閣，1984年），**経営史学会編『経営史学の20年』**（東大出版会，1985年）のほか、『**史学雑誌**』毎年5月号（回顧と展望）に掲載されている分野別の研究動向などを参考にするとよい。

（経済学部教授）